

ある参加者の√オーランドー日記

2023.11.9

今日はダンスワークショップ√オーランドーの参加者が初めて集まる顔合わせがありました。私はこれから、この作品の創作過程を「伝記作家」のように記録してみようと思います。日記と伝記は異なる手段ではありますが、人を記録に残すということには変わりません。異なるのは期間の長さと人数のみです。きっと今回の記録も、あるいは議事録もレポも一種の伝記だと言えるかもしれません。

私や他の参加者たちは初対面だったけれど、今日のこれがダンスワークショップのスタートではなく、既に√オーランドーの波が中村蓉さんの中で始まっていたとは驚きでした。顔合わせというのは一番初めの開始地点とは限らないものでしたね。盲点です。

振付家の蓉さんも大変面白く素敵な人ですが、参加者の皆々様も濃くて面白くて素敵な方々な予感のする本日の顔合わせでした。ダンスワークショップとのことでダンサーの方々なのかと思いきや、役者やシナリオライターや音楽をやっている方など多種多様で驚かされました。これはこれから日記を書く腕が鳴りますね。

参加者それぞれの原点たるオーランドーの感想や読み進め方も様々でした。無論、正確な記録を残すためのメモは残しましたとも。読みにくいという感想と、オーランドーがうじうじしていて好きになれないという感想が目立ちました。え、私？大変申し訳ないことに手に入らずネット通販で取り寄せている最中でした……。不甲斐なくて穴があったら入りたいと思いましたよ。これ以上書き記すと落ち込むのでこの話はここまでにします。

後は今回の公演に協力してくださるらしいスペシャリストの紹介もありました。参加者に負けず劣らず濃い方々だったのですが、特に時間を割いて説明があり印象に残っているのは海洋生物を研究している学者さん。オーランドーを題材に海獣学者に話を聞こうという蓉さんの発想に脱帽するばかり。でもお話を聞くうちに確かに 360 年生きるオーランドーという生きものと海を優雅に泳ぐ大きな鯨は似ているかもしれないと感じました。

今日は話が盛り上がりも盛り上がり、最後に予定していた身体を実際に動かしてみる時間は無くなってしまいました。とっても面白い時間でしたが、私は楽しい座談会に来たのかダンスワークショップに来たのか少々疑問です。これもきちんと記録に残すことにしましょう。



ある参加者の√オーランドー日記

2023.11.16

√オーランドーのリサーチWS二日目でした。私は今日も、この作品の創作過程を「伝記作家」のように記録してみようと思います。

スペシャリスト三村一貴さんからの講義のような形式。通称、ミムラ倶楽部。私は東大で研究されている方のお話を聞くのは初めてなのでワクワクしました。三村さんはとても丁寧でお上品な方で、なんだか古本屋の香りがするような雰囲気の方です。進め方は蓉さんからのQ&A形式で、散文的な様子。

まずは、英語の原文でもお読みになった三村さんからの文体に関するお話が印象的でした。『オーランドー』はオーランドーの心境、状況説明、そしてとびきり出しゃばる伝記作家の持論が入り混じっているのです。その話を聞いた時、文章を一読しただけでは把握しきれない読みにくさは、それから来ているのかもしれないと思いました。もともと台詞が少なくて地の文が多い小説です。ただそれでも翻訳では読みやすくなっていて、日本語と英語の違いによる工夫が反映されているらしいのです。伝記作家のご意見をですます調で、それ以外のシーンをだである調で、という風書き分けています。しかし英語にはその違いがないから、読者自身が暗号を解読するように読み進めなければならないそう。私は英語が苦手なわけではないけど、特別得意なわけではないので、原典または原文は読めないかと恐れおののいてしまいました。この日記では翻訳に敬意を表して、「伝記作家」のように、ですます調で書いています。

百年単位で長く生きる主人公という比較として『ポーの一族』が挙げられていたのですが、私は読んだ事無かったので脳内で500年生きる魔女が主人公の『魔女の心臓』を思い浮かべながら話を聞きました。彼らとオーランドーの違う所は、時代に取り残される、人々に置いていかれるということ意識していないことだそう。移りゆく時代や人々をほぼほぼ意に介さず我が道を進むオーランドー。だからなのかオーランドーは変わりません。〈オーランドーは変わらない〉何かのタイトルのようです。

さらなる言語の特徴や、性転換シーンの概念の擬人化と寓意劇について、櫛の木、オーランドーとニック・グリーンの違いと象徴するものなど、沢山書き記しておきたいことがあるもののページに収まらないので、ここでは列挙するに留めてしておきましょう。

最後は変わらないオーランドーをイメージして、オーランドー役のダンサーに次々に服を着せていくワークをしました。何を着せられても意に介さぬオーランドーと、勢いよく変化していく恰好から感じる時の流れ、そして伝記作家の心境になるカメラマン。そんな私たちを静かな瞳で見つめる三村さんが印象的でした。



ある参加者の√オーランドー日記

2023.11.19

√オーランドーリサーチWSの3日目。伝記作家になりきって日記を書くのにもまだ慣れません。それはさておき、今日いらしたスペシャリストは現代美術家の浅野ひかりさん。丁寧で丸い雰囲気の方ですが、作品と発想は仰天するほど楽しく面白かったです。浅野さんの作品『丸い地球の模様替え』、私もこたつを回してみたいです。

今回届いた浅野さんのアイデアやアイテムこと「Asazon」はどれも非常に面白く、ダンサーとして踊りながらも童心に帰ったかのような無邪気さや楽しい雰囲気が溢れ出るような効果がありました。これから『√オーランドー』の中で作品に成っていくのを踏まえるとまだ未完成なのかもしれないが、「Asazon」も浅野さんの作品、あるいはその断片と言えるかもしれません。さて本日の「Asazon」はなんと豪華四本立て。今までの話中心のWSとは違う正真正銘の身体表現へと切り替わりまして、私としてはこの面白さをどう言葉に表したらいいのやらと困りながらも日記を付けています。

まず行ったのは原典『オーランドー』の序盤も序盤、垂木に吊るされた生首を、なんと紐と鈴で表しておりました。ちなみに猟奇的なシーンは作中でもここだけなので、むしろ何故最初にこんなシーンを入れたのだろうか?と疑問に思います。私の脳みそでは吊るされた首で連想する物はせいぜいてるてる坊主なので、揺れる鈴という視覚と聴覚に訴えるアプローチは凄いなあと感心するばかりでした。その中で動く私たちとしては非常に面白い体験なのですが、それは踊る参加者の特権なのです。

お次はオーランドーが女性に変わるシーンを彩る純潔・貞節・謙譲三姉妹に変身しました。変身アイテムはクリスマスツリーの飾りのモール。このワークはアイテムによって変化するダンサー達が見所でした。怪しげな音楽とともに三人娘に変身すると、モールはヴェールやバンダナや謎のアイテムに七変化し、最終的にはオーランドー(役の浅野さん)に巻かれていきました。オーランドーはクリスマスツリーだったのでしょうか?

その後に行った、レインコートを使った二人羽織りと、暗闇で文明の利器スマホのライトで照らされるオーランドーの二つのワークも面白かったのですが、後半いささか駆け足だったのもあって最初の2案のインパクトには敵わなかったように思います。今後もまだまだ届くであろう「Asazon」が楽しみです。



ある参加者の√オーランドー日記

2023.11.28

√オーランドーのWSはクリエイションパートに入りました。今までのスペシャリストの皆様のお話やアイデアなどのリサーチを踏まえて、今日からとうとう創作の始まりです。まずは冒頭も冒頭、〈序〉のシーン作りでした。私は遅刻参戦でしたので、伝記作家として正確な情報を記録できないことが残念でなりません。しかしそもそも伝記というものは歴史上の人物など情報が不正確な出来事をお伝えすることもありますので、私の想像が混ざるのも当然のことだと言えるでしょう。

さて、原典『オーランドー』の〈序〉と言いますと、本文ではなく世間一般で言う前書きにあたります。小説本文が始まる前に童話や古典文学の一節が引用されていることがありますよね。私はあのページが好きです。物語が始まる前に一度直接関係があったりなかったりするものを挟んでくれることで、よりその世界に入りこみやすい気がするのです。原典『オーランドー』では、〈序〉で著者ヴァージニア・ウルフの執筆時の協力者を列挙しています。今回のダンス公演も先日挙げたスペシャリスト等々たくさんの協力者がおります。ということで、〈序〉の文章を√オーランドーのために替え歌よろしく言いかえてみる実験から始めました。WSの参加者には俳優もいるので、読みあげる声がとても聴きやすかったです。

朗々と前置きの台詞が響く中に、奇妙な動きをするダンサーが現れます。彼女の動きは静かでありながら空間を自分色に塗りかえてしまうような独特の空気感があり、見ていると宇宙空間に放り出されたような気持ちになります。そんな彼女を訝しげな眼で解説する人が一人。解説の様子は実況中継のようであり、伝記作家のようでもありました。(私、お役御免でしょうか……!?)

その後、現代美術のスペシャリスト、浅野ひかりさんから届く「Asazon」も登場。そして言語のスペシャリスト三村さんも登場…? 参加者の一人が、たくさんメモをして役作りをして三村さんに扮していました。一回しか直接お会していないのに非常に三村さんそっくりで、参加者からは感嘆の笑い声が巻き上がりました。これは俳優さんの特殊技能だなとしみじみ思ったのです。そして三村さんになりきるべく降霊術がリハーサルルームで何度も行われていました。ミムラ倶楽部でありながらダンスをする振付があるのですが、踊ると三村さんが抜け、三村さんを降ろすと振付を忘れてしまうのです。同時に別のことを行うのは難しいのだな、と眺めながら改めて思いました。

